

プルトニウム社会に生きる ——核エネルギー小説として読む『わたしを離さないで』

Living in the Plutonium Society:
A Reading of *Never Let Me Go* as Nuclear Fiction

麻生 えりか
Erica ASO

はじめに

原爆投下の9年後に長崎で生まれたカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro, 1954-) のデビュー小説『遠い山なみの光』(*A Pale View of Hills*, 1982) は、彼が生まれるより少し前、1950年代前半の長崎で生きる人々の姿を描いた作品である。この小説において、1945年8月9日にこの町に投下された原爆は、3つの短いシーンで言及されるだけだが、登場人物それぞれの人生に決定的な影響を与えていて、この小説は原爆によって人生を変えられた人々の物語だと解釈することができる。つまり、原爆は、「小説の中心にある驚くべき不在」(Lewis 39)として、圧倒的な存在感を放っている。イシグロの小説の出発点に大いなる不在としての原爆があることは、彼のその後の小説における核の表象を考える上で重要な意味を持つ。というのも、これ以降のイシグロの小説中に原爆あるいは原発への言及がたとえなくても、小説の根幹には、核に対する作者自身の強い問題意識があると考えられるからだ。(麻生 2013: 37-40)

本論では、クローン人間を描いたイシグロの2005年出版の小説『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*) を、核エネルギーを表象した小説として論じる。「核」という言葉も原爆も原発も登場しないこの小説に、なぜ核エネルギーが表象されているといえるのか。それは、戦後イギリスの核エネルギーの歴史とその言説にこのテキストを照らし合わせることで可能になる。イギリスにおいて、第二次世界大戦中から国家事業として進められてきた核エネルギー政策を直接語ることは、一種のタブーとされてきた。語られるとしても、その言説は主に、原爆・原発に賛成か反対かという対立軸をめぐって展開されてきた。イシグロは、その二項対立がとりこぼしてきた、核施設から生活の糧を得る当事者たちの声を間接的に『わたしを離さないで』の中で表象する。そうすることで、彼は、民主主義を否定するプル

トニウム社会に対する強い危機感を表明している。被爆者の母を持つ長崎出身のイギリス作家・イシグロにとって、核エネルギーの問題を考えることは、すなわち核と人間存在のあり方を考えるという、すぐれて社会的・倫理的な問題なのだ。『わたしを離さないで』が描くのは、核物質——なかでもとりわけ、その毒性が数百万年後まで消えない人工的に作られる放射性物質プルトニウム——との共存を強いる社会、つまり、人間の自由と権利を剥奪する「プルトニウム社会」を生きる現代の私たち自身の姿である。本論では、イギリスにおける核エネルギー史とその言説の変遷をたどった上で、『わたしを離さないで』における核の表象を分析したい。

1. イギリスの核エネルギー史

イギリスにおける核エネルギーの歴史は、唯一の原爆投下国として戦後の核エネルギー言説を牽引してきたアメリカの核エネルギー史と共通点を持ちながら、相違点も多い。イギリスの核との関わりの出発点は、ナチス・ドイツに対抗するための原爆製造であった。当初、イギリスの科学者がアメリカ側に情報や技術提供をして進められていた英米の原爆共同開発は、1942年のアメリカのマンハッタン計画発足により中断される。その後、45年にアメリカは単独での原爆開発に成功し、戦後世界における政治的・経済的覇権を手にする。戦後の冷戦時代に入ると、原爆製造でアメリカ、次いでソ連に遅れをとったイギリスは、かつての大国の威信をかけて原爆・水爆開発を急いだ。さらにイギリスは、核兵器製造を急ぐだけでなく、原発事業で世界の先駆者になることを目指し、47年に西カンブリア州の海沿いの町セラフィールドをウィンズケールと改名し、そこに軍事用プルトニウム生産炉・再処理工場の建設を開始した。国民の議論もないままに、イギリス政府は、軍事・民事の核エネルギー利用を同一のサイトで行うことを決め、核エネルギー政策に邁進したのである。¹ 当時のイギリスが製造を急いだのは、プルトニウム型原爆と呼ばれる、長崎に投下された原爆と同じ型のものであったことは注目に値する。イギリスがプルトニウム型原爆製造を目指したのは、広島に投下されたウラン型原爆に比べ、原料となるプルトニウムの調達・精製が比較的容易だからという理由によるが、プルトニウムの毒性の強さと管理の難しさが、その後の核エネルギー政策に重い課題をつきつけることになる。こうして、ウィンズケールでは、プルトニウムを原料にした核兵器製造と電力発電・供給という、核の軍事利用と民事利用が並行して行われることになった。イギリスは52年に原爆実験、57年には水爆実験を成功させ、念願の核兵器を手中に収めた。

原発に関しては、56年、ウィンズケールのコールダーホール原発から送電を開始し、イギリスは世界で最初に商業用原発を稼働させた。その後も原子炉や核燃料処理工場が増設さ

れたウィンズケールは拡張を続け、イギリス最大の核施設となってゆく。しかし、57年10月、軍事用プルトニウム生産炉の火災事故「ウィンズケール・ファイヤー」が発生する。この事故は、チェルノブイリの原発事故にも匹敵するほどの大事故だったにもかかわらず、事故当時は原発労働者や地元住民への被害は公にされず、その実態が資料とともに公開されたのは30年後である。それでも事故以降、ウィンズケールの拡張計画は反核団体や環境団体の大きな反対運動にあい、危険な核の汚染源として、ウィンズケールの名は世界に知られるところとなった。秋元が詳しく報告する住民や環境団体による反対運動や公聴会の記録からは、何度も替わる原発管轄機関と政府の「いきすぎた秘密主義」が浮かび上がる。81年、英国核燃料公社 (BNFL) は、ウィンズケールの汚名を払拭するため、その地名をもとのセラフィールドに戻す。そこには、悪名が高くなった「ウィンズケール」を文字通り「消す」ことで、事故や放射能汚染によって累積された負のイメージを払拭しようとする意図がある。秋元はここに、イギリスの核エネルギー史の特徴である「隠蔽する文化」を指摘する(135)。

50年代、60年代を通して建設の続いたイギリスの核施設は、次々と事故を起こし、その操業実績は燦々たるものだった。事故隠しやデータ捏造は核管轄組織の常套手段となり、核エネルギー先進国という国際社会での地位を守ることに腐心するイギリス政府は、本来第一に守るはずの国民に、迅速で正確な事故関連情報を伝えなかった。さらには、70年代後半、BNFLは国民の間に高まった反対の声を無視し、ついに使用済み核燃料の国際的な再処理ビジネスに乗り出す決定を下す。つまり、日本を含む諸外国の原発で出た使用済み燃料を再処理して取り出したプルトニウムを再利用する一方で、その際に出た放射性廃棄物、すなわち核のゴミをもとの国に送り返すという核燃料サイクルを完成させたのである。86年のチェルノブイリ原発事故後、イギリスでも原発の危険性が再度懸念・議論されたが、結局、ソープと呼ばれる酸化物燃料再処理工場の稼働開始により核燃料サイクルが完成、プルトニウムの重要性和危険性がますます高まる仕組みが導入されることとなった。その後、放射性廃液による汚染問題が深刻化し、セラフィールドは「核のゴミ捨て場」、「核の洗濯場」と呼ばれるようになる。²

イギリスでは89年に電力事業が自由化され、原発は96年に民営化される。90年代半ばから、採算と安全性の面で問題の多い新規の原発は建設されてこなかったが、政府は2008年1月にエネルギー政策を再転換し、再び原発推進に舵を切っている。2011年3月の福島第一原発事故の後にも大きな議論が起こることはなく、現在、25年ぶりに新規の原発建設計画が進められている。(イギリスの原子力開発体制)³ 2011年12月の時点で、イギリスで運転中の原発は18基で、合計出力は1172.2万kW、原子力発電による発電電力量は約621.4億kWhである。総発電電力量の16.4%を供給する原発は、放射能漏洩事故、環境汚染、住民・労働者の健康問題、放射性廃棄物処理問題、コスト高など、多くの未解決の問題

を抱えながらも存続し、依然としてセラフィールドはイギリス原子力発電の重要な一翼を担っている。そして現在、イギリスは世界最大のプルトニウム保有国である（秋元 219）。

2. 核エネルギー言説と核批評

以上、簡単に見たように、原爆製造という核の軍事利用を目指して第二次世界大戦中に始まったイギリスの核エネルギー史は、軍事利用と民事利用をその両輪としてきた。核の軍事利用と民事利用、または平和利用という二項対立は、53年12月のアイゼンハワー米大統領による国連演説「平和のための原子力」(“Atoms for Peace”)に端を発する。

The United States knows that peaceful power from atomic energy is no dream of the future. That capability, already proved, is here-now-today. Who can doubt, if the entire body of the world's scientists and engineers had adequate amounts of fissionable material with which to test and develop their ideas, that this capability would rapidly be transformed into universal, efficient, and economic usage? (Eisenhower)

もちろん、アメリカは核兵器のない世界平和を真に願ったわけではない。この演説は、ピーター・カズニック (Peter Kuznick) が指摘するように、各国が次々と核兵器開発に成功し、もはやアメリカが核を独占できない状況下において、各国の注意を核の平和利用にひきつけることで、さらなる覇権を狙う大国の思惑から生まれたものである。(田中 9-22) アイゼンハワーのこの演説を契機として、核の軍事利用と民事利用の対立は、核の「悪い」利用と「良い」利用の対立と同義となった。チェルノブイリやフクシマを経験した今日の私たちから見ると、当時、民事利用の善性を疑う者がいなかったことは、無邪気というより無知という他ない。しかしながら、アメリカによって意図的に作られたこの二項対立は、冷戦下、そしてその後の世界で、核エネルギー言説の強固な骨格となって世界に拡散していくことになる。

アメリカの核批評家の一人、アラン・ネイデル (Alan Nadel) は、冷戦下の封じ込め文化が国民に押し付けた「価値観の画一化」の中心に、アメリカ対ソ連、自己対他者という二項対立、すなわち “narratives of Other and Same” (36) が存在すると指摘する。よき市民としての社会規範への適合を最優先する封じ込め文化は、正誤、善悪をはじめとするさまざまな二項対立を強調したが、その二項対立の源泉で沈黙を守っているのが原子力だとネイデルは主張する。

It was a period . . . when “conformity” became a positive value in and of itself. The virtue of conformity – to some idea of religion, to “middle-class” values, to

distinct gender roles and rigid courtship rituals – became a form of public knowledge through the pervasive performances of and allusions to containment narratives. . . . The unspoken source of potency in this narrative, I argue, is atomic power, which is also the source of its incoherence, an incoherence closeted by containment in the same way that sexual and political roles were. It attempts to keep the narrative straight, containment equated containment of communism with containment of atomic secrets, of sexual license, of gender roles, of nuclear energy, and of artistic expression. (4-5)

封じ込め文化が「危険」と見なし封じ込めたのは共産主義だけではない。それは、決して二項対立に還元することのできない、本来多様であるべき核エネルギー、性、芸術をめぐる言説でもあったのだとネイデルは言う。核エネルギー利用の前提を軍事利用・民事利用の対立に還元することは、実は矛盾をはらんだ核の姿を隠すのに大いに役立った。そのように単純に分けられた二つの核の姿を見せることで、核兵器や原子力発電が人々の議論の対象とならなかったことは、核エネルギー政策を推進する政府にとっては都合が良かったのである。もっとも、ドイツの社会思想家ロベルト・ユンク (Robert Jungk) が指摘するように、「地球上のどの国においても、核エネルギーの実質的な利用が開始される以前に、一般大衆が適切で客観的な情報を与えられたことはないし、彼らの意見の発表を請われたこともない」(118) のだから、これは当然と言えば当然である。核エネルギー言説は、はじめから国民に開かれてはいなかったのだ。

70年代のイギリスでは、国内の原発事故が次々と明らかになり、もはや原発が100%の善ではないことが国民の間にも知られるところとなった。のちにセラフィールドと再改名されるウィンズケールでは、核燃料の再処理工場建設をめぐる大きな反対運動がおこり、公聴会が開かれた。その際に批判の対象としてやり玉に挙げたのが、ウランの核反応により人工的に作られたプルトニウムである。イギリスの核施設が一貫してプルトニウムを主な原料にして兵器と電力を生産してきたからこそ、核エネルギー推進派は「プルトニウム安全神話」を作り上げ、原発反対派を抑え込もうとしてきた。

イギリスの核兵器工場は、以前からずさんな放射線管理が問題となっていたところだった。……イギリスでは原子力労働者の死をめぐる法的な係争事件が目立つようになった。そのほとんどが、イギリスの原子力研究開発のセンター、ウィンズケールに集中している。……しかし、今なお、「プルトニウムが原因で死亡したと認定されたケースはひとつもない」ということが、プルトニウム安全神話の有力な根拠となっているのである。(高木 122-23)

グリーン・ピースなどの環境団体をはじめとする原発反対派は、「核の狂った論理」、すなわちプルトニウム安全神話がまかり通る「プルトニウム社会」は、民主主義を否定する元凶だ

として攻撃した。反対派は、高い発癌性を持つ危険物質プルトニウムが人間の自由や権利よりも優先されるプルトニウム社会では、行き過ぎた管理主義が支配するという強い懸念を表明したのである。(秋元 109)

同様に、核物理学者の高木仁三郎も、社会的・地理的・時間的広がりをもつ危険な核物質プルトニウムが支配する社会は「極端な管理社会」と同義だと批判する。一度生産されたプルトニウムは決して消えることがない。非常に強い毒性を何百万年も維持するその物質は、何代にもわたって人間が永遠に管理し続けなければならないのである。

プルトニウムの世界は極微の世界である。しかし、その極微の世界が問われるのは、同時にこの物質の毒性や核物質としての威力の巨大さである。……私たち人間が確実にカバーできるのは、プルトニウムの関わる時間的・量的な何十桁という幅の中のごく一部、ほんの数桁の範囲ではないだろうか。それ故に、「人類はプルトニウムと共存できるか」の問いが発せられるのである。この壁を越えようとするとき、社会は極端な管理社会へと突き進むしかない。これは、遠い将来のことではなく、進行形の事柄である。(高木 135-41)

このように、戦後、国民に議論する間を与えず核エネルギー政策を推進してきたイギリスでは、50年代、60年代と続いた原発事故を契機に、国民の間でプルトニウム社会をめぐる推進派と反対派の対立が鮮明になっていった。

冷戦下でさまざまな言説が二項対立に帰され硬直する中、ネイデルがその状況を打開する可能性を期待したのが核批評、“nuclear criticism”である。その目的は、多様な批評理論を用いて、二項対立に封じ込められてきた核エネルギー言説を解放し、変えていくことである。

... [T]he field of nuclear criticism targets a variety of goals and areas out of a felt necessity to alter the discourse surrounding nuclear arms, through the application of contemporary critical theories, including deconstructionist, rhetorical, psychoanalytic, Marxist, and semiotic. At stake is an attempt to construct alternative way of knowing the atom, its power, and the human or social relation to that power. ... (35-6)

ネイデルは、封じ込め文化の言説を無批判に受け入れず、あるいは最初から否定せず、広い視野からの再検討によって、人間と社会の問題として核エネルギーをとらえ直すことの重要性を訴える。冷戦下のアメリカで80年代に誕生した核批評は、ヒロシマ・ナガサキを、あるいはチェルノブイリを正面から論じることなく、冷戦終結というアメリカの状況変化により下火になっていった。⁴ しかし、ネイデルのように、封じ込め文化によって二項対立に単純化された核エネルギー言説の見直し、それへの介入の可能性を探った核批評家がいたという事実は強調しておいてよい。核批評の目標、すなわち、核エネルギーを自らの問題として

問い直し、必要ならその常識、神話を変える可能性を探ること——それは、現在の核エネルギー社会を生きる私たちが依然として目指すべき方向であり、イシグロが小説を通して表明する問題意識でもあるからである。

3. 「人間類型」の声 ——『セラフィールド・ストーリーズ』

プルトニウム社会はその構成員を明確に二分すると言ったのは、高木と同じく核エネルギー問題を文明の問題ととらえるユンクである。ユンクは、1977年に『原子力帝国』を著し、プルトニウム社会が生み出す階級の分化に警鐘を鳴らした。

原子力推進派は彼らのいちかばちかの賭けで、最後の勝利を得るために多くの危険を冒す気であるが、それらのうち……新しいエリートという「制度的方策」ほど危険なものはない。それは、原子力賭博者とその援助者が民主主義を新しい階級秩序のために犠牲にする覚悟でいること、彼らが既存の不正な権力関係を安全性という目的から永続化したがつていることを含んでいる。それだけでなく、この考え方の背後には、危険な装置の要求通りに「確か」で、意志なしで働く機械部品と同じような感情がなく、注意深く、信頼でき、飽きることがなく、意のままになる「人間類型」をつくりだすことができるだろうという思想があるのだ。(95)

核の軍事利用と民事利用、核エネルギー政策の賛成派と反対派、民主主義社会とプルトニウム社会、そしてプルトニウム社会における「新しいエリート」と「人間類型」（英語では“human type”と訳される）という「新しい階級秩序」——アメリカの封じ込め文化政策と歩みを共にしながら展開されてきた核エネルギー言説は、封じ込め言説の二項対立構造を確実に取り込むだけでなく、それを様々に変奏することで、その構造を強化してきたといえる。

しかし、その二項対立が大小の矛盾をはらんできたことが、核エネルギー政策に直接関わってきた人々により、近年少しずつ明らかにされている。ここでは、核エネルギー言説の基盤となってきた対立構造に疑問を呈するテキストの一つを紹介したい。セラフィールドでの36人へのインタビューをハンター・デイヴィース (Hunter Davies) が編纂し、2012年に出版された『セラフィールド・ストーリーズ——イギリス初の原発と生きること』(Sellafield Stories: Life with Britain's First Nuclear Plant) には、セラフィールド (ウィンズケール) の核兵器工場、原発に関わった人々の生の声が記録されている。36人の中にはエリートも含まれるが、なんといってもこの本の意義は、核エネルギー言説がエリートだけのものではなく普通の市民のものでもあることを、彼ら自身の言葉で表している点にあるだろう。先に挙げたユンクの図式の「エリート」が原発推進派を指すとする、このインタ

ビュー集には、その対立項である「人間類型」——「危険な装置の要求通りに『確か』で、意志なしで働く機械部品と同じよう感情がなく、注意深く、信頼でき、飽きることがなく、意のままになる」「人間類型」——の声も反映されているはずである。しかし、このインタビュー集を読み進めると、兵器工場や原発の労働者たちを意志のない「人間類型」としてひとくくりにすることはとうてい不可能であることが明らかになる。それと同時に、原発反対を声高に訴える反対派の人間たちも現場や地元の人々を理解しないエリートに他ならないこと、つまり、原発推進派と反対派という表向きの対立の裏には、声の大きい「エリート」と声を持たない「人間類型」の対立が隠されてきたことが明らかになるのだ。

インタビューを受けた人々の言葉は、政府の法律や原子力管轄機関の報告書、あるいは原発反対派の理路整然とした議論とは異なり、時に脈絡をたどるのが困難で、また標準英語で発話、記録されていないために読みにくいこともある。しかし、セラフィールドの核施設に直接関わった人々の率直な声を収録したこのインタビュー集は、その他の公式資料と同じく、イギリスの核エネルギー言説の一部であることに変わらない。たとえば、溶接工のヘッド (David Head) は、自分たちのような「番号で呼ばれる人間」と「名前で呼ばれる人間」、つまりお偉方という、原発での階級秩序に言及する。“And all of a sudden, you realized, there was people wid names. At Sellafield, we all ‘ed numbers. Mine was 08188. You nivver forget them, . . . I never forgot that, that there was people wid names and people that were just numbers.” 08188 という番号で呼ばれていた自分が「突然」、名前を持つ人間に会った時の驚きを語るヘッドの声は、プルトニウム社会の排他性とうさん臭さを露呈する。“They always used to say, ‘If anybody ivver mentions nuclear energy, you can put a third down to truth, a third down to lies and a third down to bullshit.’” (97) 核エネルギー言説の3分の1は真実で、3分の1は嘘で、残りの3分の1はたわごとだというヘッドの持論は、自分たちの声を無視して論戦を繰り広げてきたエリートたちへの痛烈な批判でもあるだろう。

原発で働いていた両親を癌で亡くしたマネージャーのトム・ジョーンズ (Tom Jones) は、自らも癌に冒されるかもしれないという恐怖に脅えつつ、核施設と癌発生率の間に明確な関連性はないとするプルトニウム安全神話を信じようとする。セラフィールドでは、イギリスの他地域に比べて甲状腺癌をはじめとする癌や小児白血病の発生率・死亡率が明らかに高いにもかかわらず、「プルトニウムが原因で死亡したと認定されるケースはひとつもない」とされる。それは、たとえ労働者の死が係争事件となっても、BNFL が遺族に和解金を支払うことで訴えを取り下げさせる、いわば「被害者の沈黙を金で買う行為」(秋元 178) が続けられてきたからに他ならない。ジョーンズは、セラフィールドでの発癌率が高いのは、大気中の放射線量がこの地で特別高いからではなく、人の出入りが激しい地域によく見られる傾向だからだというエリートの作った神話を信じようと努力しているようにさえ見える。

“Of course I had questions myself, but in the end I was pretty happy that there was no wool-pulling, that genuinely the research that was done indicated it was a population-mixing problem rather than a radiation problem.” (223) そして、ジョーンズは、たとえ原発が両親の死の原因であったとしても、セラフィールドと自分の人生を切り離すことはできないと言う。

Sellafield has been my entire life, it's been my income, it's been my pension, it's been the place on the doorstep, been the familiar part of the scenery. I just can't imagine what it would have been without it. . . .

When you think of my dad's career, mine and now my son's career, the thread of Sellafield runs through it all. It's kept us together and kept us in a decent manner of living. (224)

親子3代にわたって核施設で働き、癌の恐怖に脅えながらもセラフィールドのもたらす安定した地位と収入に満足し、誇りを抱くジョーンズの姿は、「人間類型」とは似て非なるものである。核施設に頼って生きていくより他に選択肢を持とうとしない彼にとっては、エリートの言説を信じるのが生きるために必要だからそうしているのであり、何の疑問も持たずに機械部品となって働くこととは違うのである。

そして、最後に紹介するのは、原発反対派をも現場を理解しないエリートと見なし、推進派と反対派が戦わせる議論の狭間で行き場を失くした地元民、“locals”の声である。セラフィールドで整備工、工場長、市議会議員を歴任したデイヴ・バンクス (Dave Banks) は、セラフィールドに乗り込んで派手なパフォーマンスを繰り広げ、公聴会等での演説で核施設閉鎖を訴える反対派に対する複雑な思いを吐露する。

Many people, like me, would sympathize with what was their core belief, that nuclear weapons were wrong. But many of us, thousands and thousands of us, owed our living to that industry, not just the weapons side of it, but the civil side of it. And they were trying to shut us down; entirely shut us down. Not just the weapons side. As far as I'm aware, no locals amongst them, none at all. (285)

バンクスは、核の軍事利用を支えていることに対する罪悪感を抱きながらも核施設に頼って生活していかざるを得ない地元民たちの声を代表している。つまり、彼は他の土地からやってきてキャンペーン活動を繰り広げる反対派の人間たちの自分たちに対する無理解と無関心を訴えている。それにより彼が暴露するのは、核施設をめぐる二項対立的議論から抜け落ちてきた地元民たちの複雑な心情である。以上、わずか3人のインタビューの抜粋からだけでも、従来の核エネルギー言説に封じ込まれてきたものの大きさが浮かび上がるだろう。それは、核のもつ暴力性、危険性を認識し、倫理的な逡巡を抱えつつも、セラフィールドを生活の場として今後も生きていくことを決意するしかない、あるいはそれを自ら選択する地元住

民の声である。

エリートの意のままになる「人間類型」とされ、核エネルギー言説の外部に追いやられてきた彼らの声は、民主主義とは対極にあるプルトニウム社会の言説のあり方を問い直している。最初に紹介したヘッドは、使用済み核燃料の処理に関する懸念を次のように表明する。

We'll be the first generation, ivver, to leave rubbish, for future generations to try and do summat wid. If you closed coal-pit, in a week you could move the coal, you can git rid of the bank, you can git rid o' the headgear, you can cap the shaft, and that's it gone. Same wid a windmill, you can take it doon.

You've got to remember now, we still 'ev all that stuff doon theer [at Sellafield]. (97)

数週間で作業の完了する炭鉱閉鎖とは異なり、たとえ核施設が閉鎖されても、その危険なゴミは半永久的に管理され続けなければならない。将来の世代への良心の呵責を背負いつつも「人間類型」を装って核施設で働く“locals”の声、二項対立のもとで無視され続けてきた声を想像することは、プルトニウム社会で生きるとはどういうことか、という倫理的な問いかけの答えを探ることでもあるだろう。イシグロの小説『わたしを離さないで』を読むと、クローン人間の姿を借りた“locals”の声が聞こえてくる。イシグロが描くクローンたちは、核エネルギー言説の中で「人間類型」とされ、まるで存在しないかのように封じ込められてきた地元民の姿を表していると考えることができるのである。

4.『わたしを離さないで』と核エネルギー

2005年に出版された『わたしを離さないで』の舞台は、1990年代終盤のイングランドである。つまり、クローン人間を主人公とするこの小説は、SF未来小説ではなく、どこかにあるかもしれない現在を描いた小説である。語り手の31歳のクローン女性キャシー(Kathy H.)は現在、臓器提供をするクローンたちの介護人を務めているが、間もなくその職から退き、自身もクローンに定められた任務である臓器提供を始めることになっている。クローンたちに家族はなく、彼らは幼い頃から寄宿舎学校で他のクローンとともに生活し、特殊教育を受け、将来の臓器提供に備える。学校卒業後はクローン同士で共同生活をしながら、まずは介護人として、その後は臓器提供人としてその任務を遂行し、多くは30歳前後で任務を全うする(クローンの一生を終えることは「死ぬ」ではなく、任務を「全うする(complete)」と表現される)。彼らは、人間に臓器を提供するという目的のためだけに、人間から作られたクローンである。

科学の話題には明るくないというイシグロがクローン人間を描いたのは、彼がクローン技

術の開発そのものに関心があったからではない。イシグロは、『わたしを離さないで』がいわゆる難産の末に完成した作品で、二度の中断の後、三度目の挑戦時にクローンという要素を入れることにしたとインタビューで明かしている。それ以前は、核エネルギーに翻弄される若者たちを描こうとしていたと言う。

この本を書くのに三回の試みをしています。……この若者たちが、核兵器や原子力に接触することになるのです。これで彼らの運命が翻弄されるのですが、そこからうまく話が续かなくなりました。……二〇〇〇年になって初めて、核兵器の方向を完全に断念することを決意して、三度目の挑戦をしたのです。当時イギリスでは確かにクローンや幹細胞研究について、侃々諤々の議論が起こっていました。ウィルムット教授がドリーというクローン羊を作ったからでしょう。私はこういう議論に普通は興味をそそられません。科学の最新の発展もフォローしていません。でも当時、これこそジグソーパズルの最後のピースだと突然頭にひらめいたのです。冷戦時代に育った私の世代の典型的な発想である核兵器のアイデアをいっそのことやめて、クローンなど、科学上の発展の観点から考え始めれば、自分が言いたいテーマがきちんと伝えられる話を書けると思ったのです。本当にちょっとしたブレイクスルーだった。(イシグロ 136-37)

イシグロの中に最初にあった核エネルギーの「方向」は、彼自身が言うように、本当にクローンに取って代わられたのだろうか。その問いに対する答えのヒントは、同じインタビューの中で彼が語る「自分が言いたいテーマ」の中に見い出せるだろう。

私が昔から興味をそそられるのは、人間が自分たちに与えられた運命をどれほど受け入れてしまうか、ということです。……歴史をみても、いろいろな国の市民はずっとありとあらゆることを受け入れてきたのです。自分や家族に対する、ぞっとするような辛苦を受け入れてきました。なぜなら、そうした方がもっと大きな意義にかなうだろうと思っているからです。そのような極端な状況にいらなくても、人はどれほど自分のことについて消極的か、そういうことに私は興味をそそられます。(イシグロ 134)

つまり、彼の「言いたいテーマ」は、人間が与えられた苦しい運命をいかに受け入れながら生きていくか、という倫理的な問題だといえよう。「たとえ控え目にではあっても、20世紀の残虐行為や災難に常に着目」(Groes and Lewis 5-6)してきた作家・イシグロは、これまでのほぼすべての作品で直接・間接に戦争を描いてきた(麻生 2013: 37)。そのイシグロが『わたしを離さないで』の執筆過程で「完全に断念」と言う核兵器は、隠された形で小説に描きこまれていると考えることができる。クローンたちの生は、プルトニウム社会において、「自分たちに与えられた運命」を「受け入れてしまう」「人間類型」とされてきた人間のあり方を暗示していると考えられるからである。高木が指摘していたように、プルトニウ

ム社会の到来は決して遠い未来の話ではなく、核エネルギーなくしては機能しえない現代社会の話だからこそ、イシグロはこの小説の設定を現代にしたのだろう。核エネルギーを表だって語らない、語れないというプルトニウム社会の不自由さ、そしてその言説の二項対立という硬直性とその打開の可能性を、このテキストは暗示しているのである。

人間に臓器を提供するという使命を負って「人間のくず」から製造されたクローンたちは家族を持たず、したがってイニシャル以上のファミリーネームも持たず、ファーストネームだけで識別される。人間以下の存在、いわば人間の対立項的存在とされている彼らは、人間に使い捨てにされる自分たちの運命を自嘲する。“‘We all know it. We’re modelled from *trash*. Junkies, prostitutes, winos, tramps. Convicts, maybe, just so long as they aren’t psychos. That’s what we come from.’ (164) 彼らは自分たちの元になった人間、つまり“possible”を探したり、将来に希望を抱くことは無意味だということを、その成長過程で悟っていく。彼らが育った寄宿学校ヘイルシャムのかつての経営者マダムは、成人後に臓器提供を始め、死を間近にした恋人同士のクローン、キャシーとトミー (Tommy) に、彼らクローンに対する人間たちの視線の真相を明かす。人間たちは、自分の家族や友人の病気を治すために犠牲になるクローンがいたとしても、クローンは人間以下の存在なのだから仕方がないと納得してきたし、極力クローンのことは考えないようにしてきたとマダムは言う。

‘ . . . However uncomfortable people were about your existence, their overwhelming concern was that their own children, their spouses, their parents, their friends, did not die from cancer, motor neurone disease, heart disease. So for a long time you were kept in the shadows, and people did their best not to think about you. And if they did, they tried to convince themselves you weren’t really like us. That you were less than human, so it didn’t matter. . . . ’ (258)

クローンにも人権があるのではないかと食い下がるトミーに、マダムはないも同然だと冷徹に答える。‘How can you ask a world that has come to regard cancer as curable, how can you ask such a world to put away that cure, to go back to the dark days? There was no going back.’ (257-58) クローンによる臓器提供のない社会にはもう後戻りできない、というマダムの論理は、核エネルギーなくしては機能しえない現代社会にも当てはまる。その社会の実現のために犠牲になる者があるとすれば、その存在を自分たちとは違うものとして異化するか、その存在を自分たちの意識や言説から消しておけばよい。この論理を支えるのは、人間と不完全な人間あるいは非人間、プルトニウム社会の「エリート」と「人間類型」という二項対立である。エリートであるマダムは、「人間類型」は臓器提供という運命を全うするより他はないのだから、人間のような自由な生はあきらめるよう、人間類型を諭すのである。こうして、クローンたちの声は封印されてきたのである。

この小説中で唯一人、クローンたちに真実を教えようとするエリートが、ヘイルシャムの

ルーシー先生 (Miss Lucy) である。彼女は、まだ幼いクローンたちに、彼らの先に待っている苛酷な運命を教えようとする。

The problem, as, I see it, is that you've been told and not told. You've been told, but none of you really understand, and I dare say, some people are quite happy to leave it that way. But I'm not. If you're going to have decent lives, then you've got to know and know properly. . . . Your lives are set out for you. You'll become adults, then before you're old, before you're even middle-aged, you'll start to donate your vital organs. That's what each of you was created to do. . . . You were brought into this world for a purpose, and your futures, all of them, have been decided.

マダムと同じく、クローンの運命は変えられないと教えるルーシー先生だが、その考え方にはマダムと決定的に違う点がある。彼女はこのあと、“If you're to have decent lives, you have to know who you are and what lies ahead of you, every one of you.” (80) と言い、運命にただ流されず、“decent lives” を送ることをクローンたちに求めるのだ。自分の生徒たちがクローンの運命を受け入れたうえで、「人間類型」としてではなく人間として生きることを願う先生の苦しい想いがここには込められている。

ルーシー先生のその想いに応えるかのように、主人公キャシーをはじめ恋人トミーと親友ルース (Ruth) は、試行錯誤しながらも懸命に短い生を生きる。彼女たちにとって、それは故郷を愛し、人を愛し、生を諦めないことである。彼らの故郷ともいえる寄宿学校ヘイルシャムは卒業後に閉鎖され、なくなってしまうが、彼らの心の中で生き続ける。3人が田舎の湿地に打ち上げられた座礁船を見に出かけた際、座礁船と朽ちた木がまばらに残る以外は一面の不毛な湿地を前に、トミーは、今はなきヘイルシャムの現在の姿を想像する。⁵ 家族や故郷を持つことを否定されて生まれ、このときすでに始まっていた臓器提供により体の一部さえ失っているトミーは、一見殺風景なこの湿地帯の風景に、無邪気な子供時代を過ごした場所のおもかげを見る。

. . . [A]nd now in front of us there was open marshland as far as we could see. The pale sky looked vast and you could see it reflected every so often in the patches of water breaking up the land. Not so long ago, the woods must have extended further, because you could see here and there ghostly dead trunks poking out of the soil, most of them broken off only a few feet up. And beyond the dead trunks, maybe sixty yards away, was the boat, sitting beached in the marshes under the weak sun. . . .

Then I [Kathy] heard Tommy say behind me: 'Maybe this is what Hailsham looks like now. Do you think?' . . . ' . . . But I always see Hailsham being like

this now. No logic to it. In fact, this is pretty close to the picture in my head. Except there's no boat, of course. It wouldn't be so bad, if it's like this now.' (219-21)

以前、筆者は、「まるでこの世の終わりのような」「不毛」さをこの場面に読み取り、この湿地帯と後述するノーフォークは、原爆投下後の長崎の風景のエコーだと論じたことがある。(麻生 2011: 68) 知らないうちに、あるいは一瞬のうちに、跡形もなくなってしまった故郷の今の姿を想像し、心にそれをとどめようとするクローンの姿は、広島・長崎に投下された原爆、あるいはチェルノブイリ、福島、そしてセラフィールドの原発事故によって被爆した故郷を前にたたずむ傷ついた人間の姿に重なるだろう。

同じく、その特徴のなさ和不毛さにより、クローンたちの心を支えるのが、ノーフォークという場所である。ノーフォークは、ヘイルシャムでの地理の授業で、これといった特徴がなく訪れる人の少ない不便な田舎、イングランドの“lost corner”、「忘れられた土地」として紹介される。同時に、“lost corner”には「遺失物保管所」という、もう一つの意味がある。そこに行けば失くしものが必ず見つかると思われ、クローンたちにとって、ノーフォークはいわば最後の砦の象徴になる。

What was important to us . . . was that 'when we lost something precious, and we'd looked and looked and still couldn't find it, then we didn't have to be completely heartbroken. We still had that last bit of comfort, thinking one day, when we were grown up, and we were free to travel around the country, we could always go and find it again in Norfolk.' . . . Norfolk came to be a real source of comfort for us, probably much more than we admitted at the time . . . (66)

小説の最後で、キャシーは、故郷ヘイルシャム、親友ルース、次いで恋人トミーを失った後、思い出だけは絶対に誰にも奪わせないと心に誓う。“The memories I value most, I don't see them ever fading. I lost Ruth, then I lost Tommy, but I won't lose my memories of them. . . . I'll have Hailsham with me, safely in my head, and that'll be something no one can take away.” (280-81) 本来人間が持つはずの家族もファミリーネームも家も持たずにこの世に送り出されたクローンたちは、所有物をほとんど持たないままに生き、最後は臓器を一つずつ人間に取られて死んでゆく。しかし、このキャシーの言葉は、故郷を想う気持ち、友情、そして愛情は、つまり、クローンたちの豊かで“decent”な人間性だけは決して誰にも奪えないことを示している。ノーフォークは、そのようにないないづくしのクローンたちの、いわば心のより所、第二の故郷となるのである。故郷に限りなく近い場所といってもいいかもしれない。

ルースとトミーが数度の臓器提供の末にこの世を去ったあと、つまり一番大事なものを失くした後、キャシーが車を走らせ向かった先がノーフォークであることは、むしろ自然なこ

とに思われる。彼女は車を降り、まばらな木々、有刺鉄線が2本張られた柵、そしてそれ
 にからまったゴミの他には何もない、風が吹きつける草原にたたずむ。

I was thinking about the rubbish, the flapping plastic in the branches, the shore-
 line of odd stuff caught along the fencing, and I half-closed my eyes and imagined
 this was the spot where everything I'd ever lost since my childhood had washed
 up, and I was now standing here in front of it, and if I waited long enough, a tiny
 figure would appear on the horizon across the field, and gradually get larger until
 I'd see it was Tommy, and he'd wave, maybe even call. The fantasy never got
 beyond that – I didn't let it – and though the tears rolled down my face, I wasn't
 sobbing or out of control. I just waited a bit, then turned back to the car, to drive
 off to wherever it was I was supposed to be. (282)

このシーンは、愛するものの記憶を大切に作るクローン女性キャシーの生が「人間類型」の
 それではなく、“decent lives”を生きる人間の生に他ならないことを訴えている。彼女がゴ
 ミにこだわるのは、失くしものをそこから見つけるため、あるいは「人間のクズ」という自
 分の出自を想うからだろうか。それとも、それらのゴミの行き着く先を案じるからだろう
 か。不毛な土地を前にゴミを見つめるクローンの姿は、セラフィールドの工場で番号人間と
 して働きながら核のゴミの行く末を憂慮するヘッドを思い起こさせる。小説最後のこの場面
 は、失われた故郷や家族・友人の面影を胸に、不毛な土地でゴミとともに暮らしていかなけ
 ればならないプルトニウム社会を生きる人間の悲しみとあきらめだけでなく、その運命を受
 け入れつつも自分らしさを失わないでいようとする彼らの誇りと強さをも描いていると解釈
 することができるだろう。

中川は、イシグロ文学を読み解く3つのキーワードとして、記憶、子供時代、廃物を挙
 げる。最初の二つはイシグロ批評に頻出するが、「廃物」をキーワードに挙げる批評家は珍
 しい。中川のこの指摘は、『わたしを離さないで』を核エネルギー小説として読む際、的を
 射ている。

『遠い山なみの光』以後、イシグロは、故郷ナガサキの名前を封じたまま、廃墟・廃
 物にこだわり続け、「経験したことのないことを思い出す」努力を続けているように
 私には思える。高熱の閃光に晒されて一瞬のうちに無に帰してしまうことの脅えを
 抱えつつ、ひとりひとり滑稽に生きるしかない者たち——錆びだらけの廃車を撫で
 まわし、掃除用具入れに踏み込み、風にはためくゴミに涙する者たち。(96)

中川は、全てのイシグロ作品は、彼の故郷である長崎を直接描いていなくても、廃物——ゴ
 ミ、残骸、がれき——を通して長崎につながっていると主張する。同じように、長崎、そし
 てヘイルシャムのエコーである座礁船の風景やノーフォークの不毛な風景は、やはりその不
 毛さによって、セラフィールドやチェルノブイリ、そしてフクシマの風景へつながってい

る。つまり、『わたしを離さないで』は、表向きのテーマであるクローンを描きながら、核エネルギー言説の二項対立から取り残されてきた「人間類型」の人間性、より良い人生を模索しながらもその運命を淡々と受け入れる、核エネルギー政策に翻弄されながらも自分たちの尊厳を守ろうとする“locals”の“decent”な姿、つまりまぎれもない、そしてかけがえない人間性を表象していると読めるのである。

終わりに

原爆の製造と使用、そして原爆と同じ原料を用い危険なゴミを半永久的に残す原発産業の導入と発展を結果的に許してきた私たちは、セラフィールド、チェルノブイリ、フクシマを経験した今こそ、その消極性を反省し、セラフィールドの住民のように核エネルギー言説に関わっていくべきなのだろう。イシグロの『わたしを離さないで』は、『セラフィールド・ストーリーズ』と同じく、まだまだ数少ないそのような試みの一つだといえよう。この二つのテキストは、プルトニウム社会に生きる人間の運命を描きながら、その運命の中で懸命に人間らしくあろうとする者たちの姿を描いている。核エネルギーは本当に私たちに必要なものなのか。人間は核と共存できるのか。核エネルギー言説を操作してきたのは誰なのか。なぜ核を語ることがタブーとされてきたのか。イシグロが描くクローンたちの生と死を通して、読者は核をめぐるいくつもの問いと向き合うことになるだろう。

戦後日本の核エネルギー言説を概説した山本は、核エネルギー言説を政治や科学の領域に閉じ込めてきたプルトニウム社会のあり方、つまり全ての議論に二項対立の構図を当てはめてその言説に蓋をしてきた私たちの消極的な態度に批判を投げかける。山本は、2011年3月の福島第一原発事故により、「ヒロシマ・ナガサキ」と「フクシマ」を結びつけて論じる動きが出たことで、「核エネルギーを『軍事利用』と『平和利用』とに区別することはできないという認識」が社会に共有されたことを評価する。しかし、その一方で、チェルノブイリの事故後に一旦は盛り上がった原発反対論が急速に勢いを失ったように、「盛り上がっては忘れ去るというサイクル」が再度繰り返されるのではないかと懸念する。「核エネルギーを抱擁した戦後日本の輿論の変遷には、新たな専門知に対して社会はどのように対処すべきかという問題が埋め込まれている。むしろ、いま私たちが問うべきは、専門知をブラックボックスの中に押し込めて足れりとしてきた社会のあり方そのものなのではないだろうか。」(309)『わたしを離さないで』は、核エネルギーを直接描かない小説が、その問いに積極的に関わる可能性が十分にあることを示している。二項対立に基づく硬直した封じ込め文化にその起源を持つ核エネルギー言説の未来は、これからは私たち自身が担い、変えていくのだという読者の決意を、この作品は誘っているのである。

※本論文は、日本英文学会関東支部第6回大会部門別シンポジウム「英米文学とエネルギー」（2012年11月）において口頭発表した原稿に、加筆・修正を施したものである。

注

¹ ユンクは次のように続ける。「市民にとって重要な決定は、当時は政治家、実業家、そして彼らのもとにある科学的鑑定人の小さなサークル内の内密な議論においてなされていた。大衆は——もしあるとしたら——提供された問題のはなやかな面のみを見せられていたのである。(118)

² イギリスの核エネルギー政策については、Bunyard, Roberts、秋元、高木を参照。セラフィールドが面するアイリッシュ海の汚染やアイルランドにおけるイギリスの原発反対運動については、McDermott を参照。

³ 2013年10月22日『朝日新聞』9頁。「英、原発建設へ——25年ぶり 中国企業が初参入」。

⁴ 日本の原爆文学研究者ジョン・W・トリート (John Whittier Treat) は、ジャック・デリダ (Jacques Derrida) の論文「黙示録は今ではない(全速力で前進、7発のミサイル、7通の文書)」(“NO APOCALYPSE, NOT NOW (full speed ahead, seven missiles, seven missives)”)を目玉に8編の論文を掲載して核批評誕生を華々しく謳ったアメリカの批評誌『ダイアクリティクス』(*Diacritics*)の1984年夏の特集号が、日本を完全に排除していることを問題視する。トリートは、原爆投下の事実を無視するかのようポストモダニズムの核戦争論を展開するデリダを引き合いに出し、「核批評はそもそものはじめから、核兵器を使用した唯一の国に集まった批評家たちによる仲間うちの会話であった」と指摘する。トリートにとって、『ダイアクリティクス』の特集号が明らかにしたのは、「核批評の西洋による占有」(353)状態、つまり「40年にわたる意図的な盲目と洞察の不足」(358)に他ならない。一谷智子も指摘するように、「日本の原爆文学の多くがヒロシマとナガサキを決して脱構築できない原点として描いているとしたら、その不在が西洋の核文学、核批評を特徴づけている」(23)といえる。

参考資料

- Bunyard, Peter. *Nuclear Britain*. London: New English Library, 1981. Print.
- Davies, Hunter, ed. *Sellafield Stories: Life with Britain's First Nuclear Plant*. London: Constable, 2012. Print.
- Eisenhower, Dwight. “Atoms for Peace.” Speech Text. *Voices of Democracy : The U.S. Oratory Project*. Web. 7 Dec 2013.
- Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. London: Faber and Faber, 2005. Print.
- Jungk, Robert. *The Nuclear State*. Tr. Eric Mosbacher. London: John Calder, 1979. 山口祐弘訳『原子力帝国』社会思想社、1989年。Print.
- Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*. Manchester: Manchester UP, 2000. Print.
- McDermott, Veronica. *Going Nuclear: Ireland, Britain and the Campaign to Close Sellafield*. Dublin: Irish Academic Press, 2008. Print.
- Nadel, Alan. *Containment Culture: American Narratives, Postmodernism, and the Atomic Age*. Durham: Duke UP, 1995. Print.
- Roberts, Fred. *Sixty Years of Nuclear History: Britain's Hidden Agenda*. Charlbury, Oxfordshire: Jon Carpenter, 1999. Print.

Treat, John Whittier. *Writing Ground Zero: Japanese Literature and the Atomic Bomb*. Chicago: U of Chicago P, 1995. Print.

秋元健治『核燃料サイクルの闇——イギリス・セラフィールドからの報告』現代書館、2006年。Print.

麻生えりか「カズオ・イシグロのコズモポリタニズム——*A Pale View of Hills* と *Never Let Me Go* における被爆の風景」青山学院大学文学部『紀要』第52号。2011年、57-76。Print.

---, 「『犠牲のシステム』を可視化する——クリストファー・バンクスの語る戦争」青山学院大学文学部『紀要』第54号。2013年、37-58。Print.

「イギリスの原子力開発体制」(一般財団法人 高度情報科学技術研究機構 世界の原子力発電の動向・西欧州 (2011年) (01-07-05-20)) Web. 20 Sep 2013.

イシグロ、カズオ「『わたしを離さないで』、そして村上春樹のこと」大野和基 (インタビュー・訳)。『文学界』第60巻第8号 (2006年8月) : 130-46。Print.

一谷智子「核批評再考——Araki Yasusada の *Doubled Flowering*」『英文学研究』第89巻、2012年、21-38。Print.

高木仁三郎『プルトニウムの恐怖』岩波書店、1981年。Print.

田中利幸、ピーター・カズニック『原発とヒロシマ——「原子力平和利用」の真相』岩波書店、2011年。Print.

中川遼子「廃物を見つめるカズオ・イシグロ」『水声通信』no.26 (2008年9/10月号) : 86-97。Print.

山本昭宏『各エネルギー言説の戦後史 1945-1960 ——「被爆の記憶」と「原子力の夢」』人文書院、2012年。Print.